

説教題: 信仰による救い。行いによる救い。

聖書朗読: ヤコブ 2:14-26 (NASB - New American Standard Bible)

14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。15 もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、16 あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい。」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。17 それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。

18 さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行ないを持っています。行ないのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」19 あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。20 ああ愚かな人よ。あなたは行ないのない信仰がむなししいことを知りたいと思いませんか。

21 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行ないによって義と認められたではありませんか。22 あなたの見ておられるとおり、彼の信仰は彼の行ないとともに働いたのであり、信仰は行ないによって全うされ、23 そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。

24 人は行ないによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。

25 同様に、遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したため、その行ないによって義と認められたではありませんか。

26 たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行ないのない信仰は、死んでいるのです。

皆さん、おはようございます。また皆さんにお会いできてうれしいです。新約聖書の中で私の好きなヤコブの手紙の説教シリーズを続けています。クリスチャンとしての生き方について、多くの実践的なことが書かれているので、多くの人がこの本を愛しています。先週は、ヤコブの手紙 2 章の前半を取り上げました。その内容は、教会でかたより見ない事、あるタイプの人を他の人よりも優遇しないように、という勧めでした。それは比較的話しやすいつピックでした。しかし、ヤコブ 2 章の後半は、私たちが対処しなければならない、かなり複雑な問題があります。

今日のメッセージのタイトルを見てください：「信仰によって救われる。行いによって救われる。」さて、どちらでしょうか？私たちは信仰によって救われるのか？行いによって救われるのか？救いに至る道について、これら両方の側面を肯定することは矛盾しているのでしょうか？このトピックは、教会の歴史においても、キリスト教神学の歴史においても、特にプロテスタント宗教改革の時代から論争を巻き起こしてきました。エペソ人への手紙 2 章にあるように、救いはただ信仰による.....信仰による恵みによる、と使徒パウロが言ったことを強調する教師もいます。ヤコブは今日見ているこの箇所でもパウロと直接矛盾していると言う人もいます。しかし、それは本当でしょうか？これはかなり複雑なテーマですが、今日は、それほどひどく複雑に考える必要はなく、パウロとヤコブが互いに矛盾しているわけでもないことをお見せできればと思います。実際、私がお見せしたいように、パウロとヤコブは互いに矛盾しているのではなく、むしろ同じことを主張しているの

ですが、やや異なる角度から論じているのです。実際、彼らはそれぞれの視点を肯定するために、アブラハムに関する同じ旧約聖書の箇所さえ訴えています。

パート 1:プロテスタントの断言 - 信仰のみによる救い。

プロテスタント宗教改革の5つの断言.....5つの原則について、以前私が話したのを聞いたことがあるでしょう。この5つの原則はラテン語で述べられています— それらがここにあります：

- 1: *Sola Scriptura* = 「聖書のみによって」
- 2: *Sola Fide* = 「信仰のみによって」
- 3: *Sola Gratia* = 「恵みのみによって」
- 4: *Solo Christo* = 「キリストのみによって」
- 5: *Soli Deo Gloria* = 「神にのみ栄光を」

これらはしばしば「5つの solas ソラ」と呼ばれます。最初のソラ (*Sola Scriptura*) とは、キリスト教の信仰と実践に関するすべての事柄について、聖典 (聖書) が最終的かつ究極的な権威であることを意味します。聖書はあらゆる教会の伝統の上に立つものです。これはプロテスタント宗教改革において非常に重要な問題でした。なぜなら、中世の教会は、聖書の明白な教えのいくつかよりも、人為的に作られた多くの教会の伝統を優先していたように思われ、時には聖書と矛盾することさえあったからです。

ここでの第二の原則は、*Sola Fide*、すなわち「信仰のみによって」です。救いは信仰のみによる、とプロテスタントは主張しました。中世を通じて、既成教会がさまざまな功德を積むことによって救いを得なければならないと人々に信じさせるような多くの慣習を加えていたため、彼らはこのように主張せざるを得なかったのです。プロテスタントは、「いいえ」と言いました - 救いは得ることはできない。そしていかなる行いによっても救いは得ることはできない。ご覧のように、私は今日のヤコブ書2章の箇所、つまり信仰と行いの問題、そしてそれらが互いにどのように関係しているのかというトピックに触れ始めています。

マルティン・ルターは、ローマ 1:17 を読んだ時、この真理に気が付きました。ローマ 1:17- 「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。」この言葉は、旧約聖書の預言者ハバククによって書かれたハバクク 2:4 「正しい人はその信仰によって生きる。」です。もし本当に正しい人になりたければ、信仰によってクリスチャン生活を送るのであって、天国への道を切り開くために善行を積み重ねることを要求するシステムに従うではありません。私たちは信仰によって生きるなのであって、行いによって生きるではありません。これが、マルティン・ルターが発見し、プロテスタント宗教改革に火をつけた真理です。

第三の原則は、*Sola Gratia*、「恵のみによって」です。救いは完全に神の恵みのみによるものであり、神からの無償の贈り物です。エペソ 2:8-9 を見てみよう。－「8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。9 行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです。」

救いは自分自身によるものではなく、神の恵みによる賜物です。救いは行いによってもたらされるものではありません。

信仰だけによって。恵みだけによって。この時点で、私たちは少し混乱するかもしれません。ここには2つの「alone」があります。神学教授のドン・カーソンの言葉を引用しましょう。彼はこう言っています：

しかし、私が12歳か13歳くらいの若者だった頃、「救いは恵みだけ、信仰だけによるものなのだろうか？それは2つの「alone」のように聞こえる。もし2つの「alone」があるのなら、どちらも「alone」ではないことになる」と思った。そしてもちろん、やがて私は少し成長し、恵みとは根拠のことであり、神の無償の賜物であり、御子のみという賜物の中に注がれた神の無償の恩恵であることを知った：それは神の無償の賜物であり、神の御子であるキリストの賜物において注がれる神の無償の恩恵である。一方、信仰のみによる救い、信仰のみによる義認とは、根拠を示すものではなく、アクセスする手段を示すものである。つまり、私たちは神の御前で義と宣言され、一生懸命頑張るのではなく信仰によって、この宣言、神の御前でこの地位にアクセスできるのである。

恵みが根拠なら、信仰は手段である。恵みとは、神が私たちに惜しみない義を注いでくださった根源的な錨である。信仰は、私たちがそれにアクセスするための手段である。私たちはキリストを信頼します：神の約束を信頼します：私たちは、神の御前で公正であると宣言される根拠となる、主の死と葬りと復活を信じるのです。

エペソ 2:8 をもう一度見ましょう－「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」この聖句に基づき、先ほど述べた混乱を解消するために、プロテスタントの福音主義者が「私たちは信仰のみによって、恵みのみによって救われる」と言うのをよく耳にします。

プロテスタント宗教改革当時、このことを明確にすることは極めて重要な課題でした。すなわち、私たちは行いによらず、信仰による恵みによって救われるということです。エペソ 2:9－「行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです。」私たちは行いによって救いを得るのではない。天国への道を勝ち得たと誇る理由はありません。

では、クリスチャン生活において、行いほどのような位置づけにあるのでしょうか。なぜヤコブは救いと行いを結びつけているのでしょうか？

ヤコブ 2:14－「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。」

20節－「ああ愚かな人よ。あなたは行ないのない信仰がむなしいことを知りたいと思いませんか。」

パート2：行いのない信仰はむなし。

大学時代、私はアルファ・ガンマ・オメガという名のキリスト教友愛会に所属していました。私たちの友愛会のテーマ聖書箇所は、テモテへの手紙第二2章15節でした。－「15 あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」(NASBでは「.....真理のことばを正確に扱う」)。クリスチャンの兄弟たちと私は、キリスト教神学におけるさまざまな論争的テーマについて、聖書の正しい解釈を求めて、しばしば真剣に神学的な会話を交わしました。ヤコブのこの箇所や、信仰と行いの関係について議論することもありました。

私たちは、20世紀の原理主義的な説教者たちが、救いは信仰のみ、信仰のみ、信仰のみによるものであり、行いは関係ないという考え方を強く説いていることに気づきました。私は、彼らがソラ・フィデ（信仰のみ）というプロテスタントの優れた強調を、バランスを欠いた硬直したイデオロギーに変えてしまったように感じました。これらの説教者たちの中には、ローマ・カトリック教会が、救いは信仰+業からもたらされると教えている（「信仰+業=救い」と特徴づける者もいました。これらの説教者たちは、その誤った教えに、「信仰+無=救い！」というキャッチーなスローガンで対抗しました。「信仰+無=救い!」

しかし、このキャッチーなスローガン自体が誤解を招きます。救いの道を非常に単純化したプロセスに落とし込み、弟子としての生活と奉仕を軽視しています。私には、福音をこの単純な定式に還元することで、キリスト教的奉仕に参加する必要がないと感じるクリスチャンが生まれる可能性があるように思えました。また、神的な生き方を求めることも同様に不必要なことでした。そう、私はそのような態度を耳にしました。私は、「信仰+無=救い」というキャッチコピーには問題があると結論づけました。

私は自分なりの代替方程式を思いつきました：「信仰+無=救い+行い」です。行いはクリスチャン生活に存在しますが、救いに至る道ではありません。通常のクリスチャン生活には行いが含まれます。もし行いがなければ、何かが間違っています。私がこの結論に至ったのは、今日のメイン箇所であるヤコブ書2章のような箇所からです。そして、エペソ人への手紙2章にもあります。

先ほど、エペソ 2:8-9 を引用しました。もう一度読みますが、10節も読みます：「8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たのではなく、神からの賜物です。9 行ないによるものではありません。だれも誇ることもないためです。10 私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」

クリスチャンの歩みにおいて、良い行いは確かに重要な役割を担っています。クリスチャンとしての私たちのライフスタイルにおいて、行いは重要な役割を担っています。私は、

10 節にあるように「私たちは神の作品である」と書かれていることに気が付きます。神は私たちに働きかけ、私たちが神が望まれるような人間に造り上げておられるのです。ピリピの人への手紙 2 章にも同じようなことが書かれていますが、その箇所はまた後日紹介しよう。

では、ヤコブが「行いを伴わない信仰が私たちが救うことができるのか」という問いに思いを巡らせるとき、何を意味しているのでしょうか。ヤコブ 2:14-17 を読みましょう – 「14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるのでしょうか。15 もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、16 あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい。」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。17 それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」

信仰はそれだけでは死んでいます。もしあなたが本当にクリスチャンとしての信仰を持っているなら、あなたの心はその困っている兄弟姉妹に向かい、彼らの必要を満たすために何かをするはずです。私たちのほとんどは、困っている人に与えられるものを持っています。しかし、「安らかに行きなさい、暖められ、満たされなさい」という敬虔に聞こえる言葉を与えるだけで、その人を助けるために実際に何かをしないなら、それは何の役に立つでしょう？困っている兄弟姉妹と分かち合えるような資源を持っていない人もいるかもしれないが、ほとんどの人は何かを持っています。

続けて読みましょう。ヤコブ 2:18-20 – 「18 さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行ないを持っています。行ないのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」19 あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。20 ああ愚かな人よ。あなたは行ないのない信仰がむなしいことを知りたいと思いますか。」

面白いと思いませんか？：「私に見せてください。私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」信仰は、敬虔に聞こえる言葉によって示されるのではなく、実践的な行動によって示されるのです。信仰は、あなたが話す言葉だけでなく、あなたがしていることを人々が見ることによって証明されます。ヤコブが悪霊について述べていることを見てください。彼らは、神が存在し、神がお一人であることを情報として知っています - 彼らはそう信じている - しかし、それは救いの信仰ではありません。これは、ある人々が「知的同意」と呼ぶものです。 - 人は、神が存在すること、イエス・キリストがこの世に遣わされた神の御子であること、さらにはイエスが死んで死者の中からよみがえったことを知的に確信することはできます。しかし、心の中でその真理を受け入れ、イエス・キリストの信者となり、キリスト教の原則に従って生きる弟子となっていないなら、

それは神の存在に対する単なる知的同意であって、救いの信仰ではありません。悪魔たちは、神が誰であり、イエス・キリストが誰であるかを知っています.....そして、神に従うことを拒んでいるために、イエスが再臨してすべての敵を打ち負かすとき、最後には自分たちが敗者となることも知っているから、身震いしているのです。神の存在を知的に認めるだけでは、あなたを救うことはできません。

神学教授のドン・カーソンの言葉をもう一度引用しましょう。私が神学校に通っていたときに見たビデオ講座のひとつで、彼はこう言っています：

もう一つの要素がある：.....信仰はまた、その真理、あるいは真理を語る神への自己放棄を伴う。それは神への信頼を伴う。サタンは、イエスが死からよみがえったことを信じているが、サタンは、キリストを決して信頼しない。サタンは、神はお一人だと信じているが、神に自分を捨てたりはしない。本物の救いの信仰は行いと混同してはならないが、単なる命題を信じることは質が異なる。... 神への自己放棄がなければならぬ。

それは一種の悔い改めを含んでいる。神と神の言葉と神の約束に身を委ねることは、信仰の本質である。それは救いの信仰ではない。... 本物の救われる信仰は、神が啓示された真理を信じるだけでなく、信仰者が素晴らしい信頼のうちにキリストに身を委ね、自分を捨てることを見出すのである。

信仰には信頼が伴う。そして神への自己放棄。

パート 3: 「行い」とは何を意味するのか？

この言葉にはさまざまな捉え方があります。前回ご紹介した「信仰+行い=救い」という方程式は、カトリックや一部の律法主義的なプロテスタントが、救いの条件としてある種の善行を加えているように見えたことを批判するために作られたものです。「行い」とは、教会への出席、財政上の献金、教会年の特定の期間の断食など特定の慣習を守ること、天国への道を得るための一般的な善行などです。マルティン・ルターのようなプロテスタントの改革者たちは、16世紀にはこのように問題を捉えていたし、現代でも問題視されています。しかし、ヤコブは正確には「業」という言葉をこのように使っていたわけではありません。

使徒パウロは「行い」について多くのことを語っています。しかしまた、彼はヤコブとは違う意味でこの言葉を用いています。そのため、パウロとヤコブは対立していると思われがちで、矛盾しているように見えて混乱することがあります。新約聖書は聖霊の靈感を受けて書かれたものですが、人間の著述家は一人一人異なる言葉を使うことがあるということをお忘れはいけません。

パウロは、このことについてローマ 3:20 で語っています-「なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」旧約聖書の律法を通して、罪の知識がもたらされます.....しかし、律法に従うことが救いの道であったことは決してありません。救いの道は常に、神と神の約束を信じることでした。

パウロは、ローマ 3:28-30 で続けます – 「28 人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。29 それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人にとっても神ではないのでしょうか。確かに神は、異邦人にとっても、神です。30 神が唯一ならばそうです。この神は、割礼のある者を信仰によって義と認めてくださるとともに、割礼のない者をも、信仰によって義と認めてくださるのです。」

神は、ユダヤ人のクリスチャンを信仰によって、そして異邦人のクリスチャンも信仰によって義とされます。

それから、パウロは、彼の主張を続けます。ローマ 4:1-5 – 「1 それでは、肉による私たちの先祖アブラハムのばあいは、どうでしょうか。2 もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。3 聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」とあります。4 働く者のばあいに、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。5 何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」

アブラハムは割礼の律法を守ることによって義とされたわけではありません。割礼の律法は、「アブラハムが神を信じたので、義と認められた」のずっと後に与えられました -- これは創世記 15 : 6 からの引用です。アブラハムが、子をもうけ、多くの子孫を残すという神の約束を信じた時です。割礼の律法がアブラハムに与えられたのは、それから何年も後の創世記 17 章です。

パウロが言っているのは、義認は旧約聖書の律法の行いから来るのではなく、神と神の約束を信じる信仰によって来るということです。ヤコブは「行い」という言葉をパウロとは違う意味で使っています。そして、ヤコブが創世記 15 章 6 節とまったく同じ箇所を引用して、彼が主張したいこと、すなわち、真の信仰は行ないを行なうものであるということ述べているのは興味深いです。そして、ヤコブが真の信仰が行動する例として挙げているのは、創世記 22 章で、神がアブラハムに息子イサクを生贄に捧げるように言われたときのことです。

ヤコブ 2:21-24 を読みましょう – 「21 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行ないによって義と認められたではありませんか。22 あなたの見ておおり、彼の信仰は彼の行ないとともに働いたのであり、信仰は行ないによって全うされ、23 そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。24 人は行ないによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。」

創世記 22 章で神がなされたことは、アブラハムの信仰を試すことでした。アブラハムがいけにえを捧げようとナイフを持ち上げたとき、神はそれを止め、創世記 22:12 で次のように言われました。－「御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」

ヤコブがヤコブ 1:2-4 で信仰の試練はやってくると言ったことを思い出してほしいです。信仰のテストは、忍耐を生みだします。創世記 22 章で、神はアブラハムを試されました。アブラハムは行動し、神の命令に従いました。そして神は、アブラハムがその命令に従い続けるのをご覧になり、適切なタイミングで彼を止められました。ヤコブにとって、創世記 22 章でのアブラハムの従順は、アブラハムが創世記 15 章で表明した信仰を証明するものでした。

興味深いことに、使徒パウロの偉大な神学的著作である『ローマ人への手紙』では、その手紙の中で信仰が最初に言及され、最後に言及されたとき、パウロは「信仰の従順」について書いています。

ローマ 1:5 – 「このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためなのです。」

ローマ 16:26 – 「今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、」（新改訳聖書は、25 と 26 節が一つになっている）
真の信仰は従う。真の信仰は行動する。

もうひとつ、引用させてもらいましょう。これは私が受講したのと同じビデオ講座のものですが、神学教授のエディス・M・ハンフリーの講義のもので、彼女はこう語っています：

新約聖書の二人の著述家（パウロとヤコブ）が「信仰」と「行い」という言葉を使い分けていることを理解すれば、二人の間に調和を見ることができると思う。「信仰」によってとは、パウロは、キリストへの信頼を意味している。「行い」によってとは、律法の具体的な行い（割礼、コシャ律法《ユダヤ教の食品法に基づいた認証システム》、安息日）、つまりユダヤ人が契約の一員であることを示す行いを意味する。ヤコブの言う「信仰」によってとは、何かがあると信じること以上のものである。彼が言っているのは、神を信じるということではなく、ある教義に対して誰かが単に知的な同意を示すのではないかという心配なのだ。そして、ヤコブの言う「行い」によってとは、パウロの言う「実」のことである。なぜなら、そのような良い行いや特性は、決して私たちの内側からだけ生まれるものではなく、聖霊の働きが私たちの内に結実することによって生まれるからである

使徒パウロは行いに否定的なわけではないのです。彼にとっても、ヤコブにとっても、行いはクリスチャン生活の正常な一部です。私の好きな聖句のひとつに、ピリピ 2:12-13 があります－「**12** そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いを達成して

ください。13 神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」

信者は行い、神は働かれます。パウロは、救いのためではなく、クリスチャン信者の通常の生活の一部として、行うようにと語っています。そして、神の目的を達成するために私たちを通して働くのは聖霊であると教えています。

ヤコブは、真の救われる信仰の一部である行いについて、3つの例を挙げています。一つ目は、冒頭の 14-17 節にある、衣服や食料を提供するような、困っている兄弟姉妹に対する憐れみの実践的な行いです。ヤコブが示す二番目の例は 21-24 節にあります：創世記 22 章におけるアブラハムの迅速な信仰の従順です。

そして 3 番目の例がヤコブ 2:25 であります – 「同様に、遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したため、その行ないによって義と認められたではありませんか。」ちょうど数ヶ月前にブルース牧師が説教したヨシュア記 2 章の物語を読むと、彼女の信仰と、その信仰に応じた行動が書かれています。彼女はイスラエルの民の神の力を信じ、斥候たちを守り、彼らを逃がす手助けしました。斥候たちは彼女とその家族がエリコを攻撃されるのを免れることを約束し、彼女は後にイスラエル人の一人と結婚し、ダビデ王の曾祖母となりました。

ヤコブが、アブラハムもラハブも「行ないによって義とされた」と言うのは、彼らの行ないが彼らの信仰の証拠となり、彼らの義認が完全なものであることが示された、という意味です。

パート 4: 具体化された信仰

信仰と行いについての議論の最後に、ヤコブ 2:26 にこうあります。 – 「たましいを離れたからだは、死んだものであるのと同様に、行ないのない信仰は、死んでいるのです。」

義とする真の救いの信仰とは、行動する信仰です。すなわち、神に信頼を置き、神に従う信仰であり、他者への真の関心と憐れみの行動につながる信仰です。

ギリシャ語で「信仰」はピステイス *pistis* と言います。単に何かを信じるという意味だけではありません。誰かに忠実であること、信頼できること、といった「忠実さ」をも意味します。私たちが神に忠実であるとき、それは神への信頼を示し、神に信頼されるだけでなく、神への忠誠を示すことでもあります。

神学教授のマシュー・ベイツはこう語っています：

新約聖書の時代において、ピステイスが具現化され、実践された関係的な姿勢ではなく、主として意志の内的な動きであったと考えるなら、私たちは間違っている。ピステイス

は純粹に心の内的な動きとしてではなく、他者との関係的な活動として概念化されていた。... パウロにとってピスティスとは、自分の心と体を使って行うものであり、それは主に外側に向けられるものであって、内側に向けられるものではない。

ヤコブもそれに同意するでしょう。真の信仰とは具体化された信仰です。それは私たちの行動に現れる信仰です。私たちの行動は、私たちが本当に信じていることを示します。ヤコブが言う「行いによって義とされる」とはそういう意味である。私たちの行いは、私たちの信仰が完全に成熟していることを示します。